

沖縄島・首里城と周辺地域の古井戸

角 田 清 美*

はじめに

先報では、先島諸島の島々は降水量に恵まれているにもかかわらず、居住に適した平坦地の地質が半固結の石灰岩であるため、生活用水を得るため工夫して井戸を設けていることを述べた（角田，2013）。

琉球諸島のほとんどの地域では、生活用水を安定して得るのは容易でなく、長い間、天水に強く依存していた。具体的には、巨樹の胸高付近に縄を巻き付け、葉や幹に降った雨水を根元に置いた甕かめに導水する、あるいは屋根ひさしの庇といに樋おけを設け、そこから甕や桶などに導水するなどであった。しかしながら、天水を集めた水には汚濁物が混じり、あるいは水温も高く、水質は短期間に悪くなり、ボウフラなどが発生しやすくなるため、安心して利用することは出来なかった。

これに比べて、地層の間から湧出する地下水は水温が低く、また水質も良いため、貯水しても簡単にはボウフラも発生しない。そのため、住民は地下水が得られそうな場所に掘り抜き井戸（筒井戸）を設け、あるいは湧水地の周辺を合方あいかたづ積み（亀甲乱きっこうみだれ積みとも言う）¹⁾の石垣で整備して使いやすくして、村井戸むらがとして利用していた。

本報文では、琉球（沖縄）の政治の中心地であった、首里城と周辺地域

*専修大学文学部兼任講師

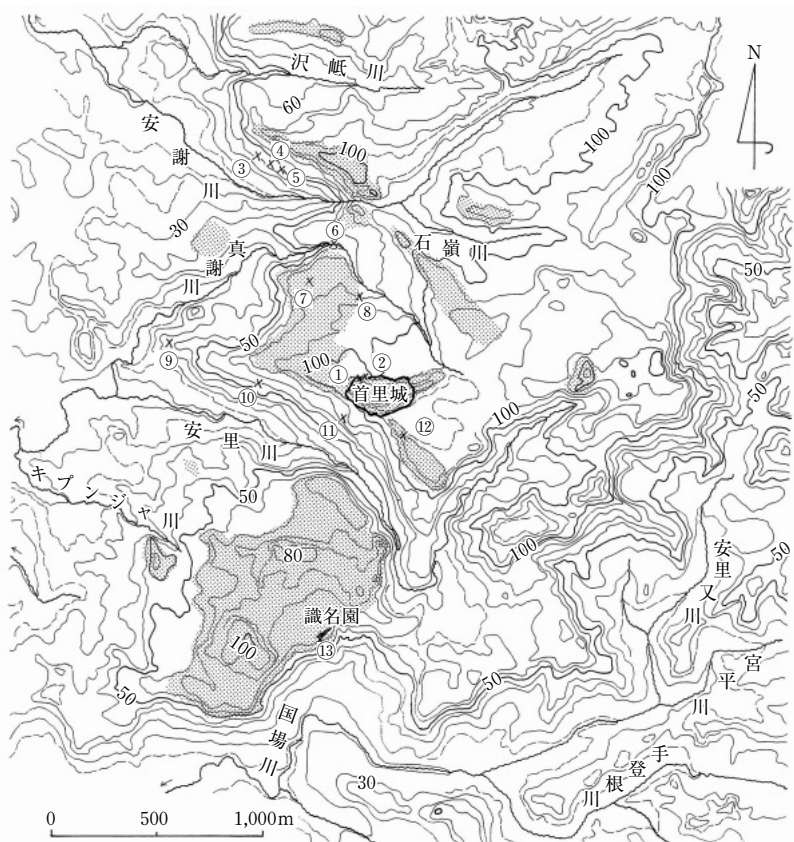


図1 首里城と周辺地域の古井戸

円内の数字は本報告の古井戸の位置。①龍樋 ②寒水川樋川 ③末吉西ヌカー ④末吉中ヌカー ⑤末吉東ヌカー ⑥宝口樋川 ⑦佐司笠御井 ⑧安谷川 ⑨松川樋川 ⑩寒川樋川 ⑪金城大樋川 ⑫崎山樋川 ⑬育徳泉 図内の細線は等高線で10m間隔（数字の単位はm）。砂模様は那覇層（琉球石灰岩）の分布範囲（主として氏原・兼子（2006）の資料による）。

にある多くの古井戸の中で、一般的な形態の筒井戸ではなく、特異な形態をしている古井戸を選び（図1）、井戸付近の地形と地質、井戸の形態、さらに古井戸にまつわる伝承などを記載した。

なお、本報文は、筆者の古井戸に関する一連の報告（角田，1993・1994・1996a・1996b・1998・2001a・2001b・2002a・2002b・2013）に続く報告である。

I. 首里城の地形と地質

首里城は標高100～136mで、東西方向に稜線を持つ丘陵地を利用して築かれた、東西約400m、南北約270m、面積約46,000m²の山城である（図2）。14世紀頃、察度によって築城されたと伝えられるが、仲松（1978）は築城以前に首里森御嶽と真玉森御嶽があり、両御嶽を核として、館や役所を二重三重に高い石垣で囲ったとしている。一方、那覇市教育委員会（1986）は『琉球国由来記』には九御嶽、『琉球国旧記』には十御嶽が記録されていると述べているが、範囲については不明である。城としての原型は15世紀初期に完成し、現在の規模になったのは、16世紀初頭から中期である（高良，2001）。

付近の地質は、主として泥岩からなる第三紀鮮新世の島尻層群に属する豊見城層と、その上位に堆積する中期更新統の那覇層（半固結の琉球石灰岩）である（氏家・兼子，2006）。両層の不整合面は標高110～120m付近であるが、場所によりその高度は幾分異なり、標高100m以下の地区においても、直径数mから数10mの石灰岩岩体が各所に点在している。

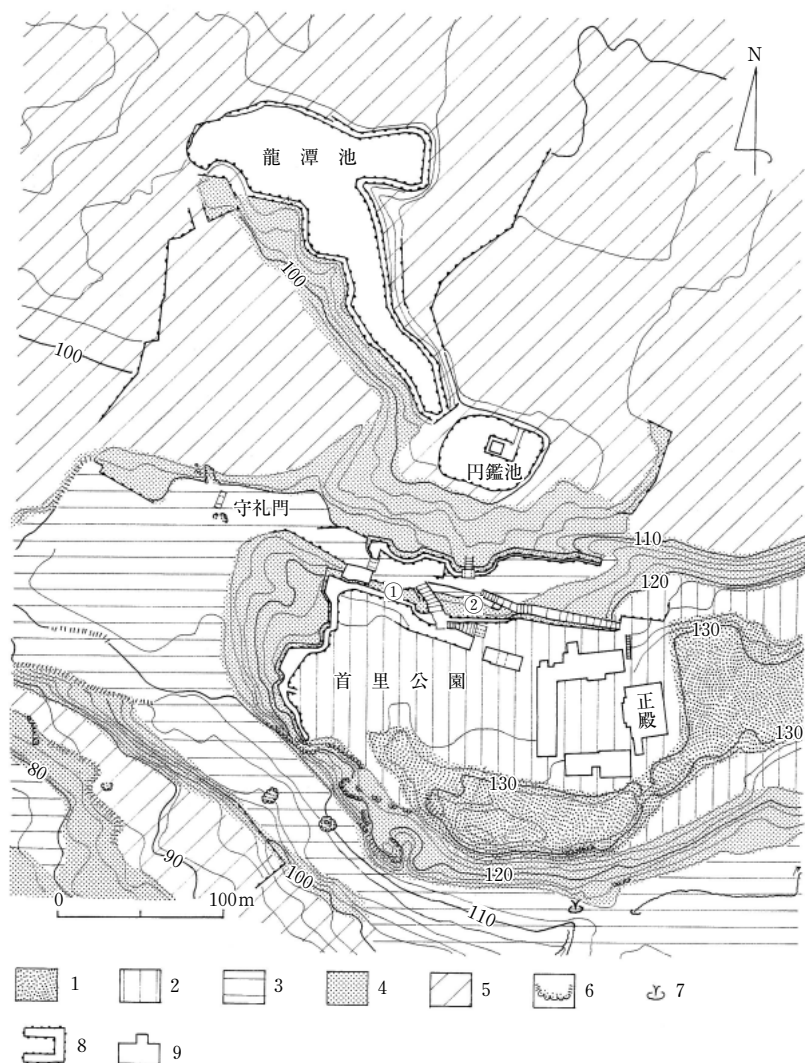


図2 首里城内の古井戸

1. 石灰岩堤 2. 上位段丘面 3. 中位段丘面 4. 段丘崖
 5. 一般丘陵斜面 6. 急崖および露岩 7. 湧泉 8. 城壁
 9. 建物 ① 龍樋 ② 寒水川樋 図内の細線は等高線 (単位: m)。

Ⅱ. 首里城内の古井戸

1. 瑞泉門前の龍樋

(1) 所在地

那覇市首里城公園内

龍樋は、守礼門から歓会門を経て瑞泉門へ向う石段の右脇で、立派な合方積みの城壁の基部に位置している（図3）。

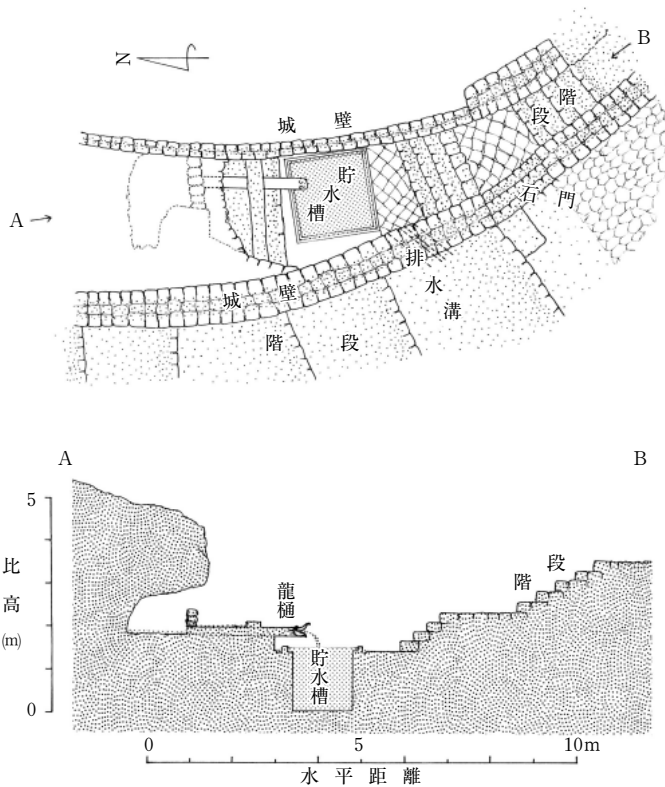


図3 龍樋の形態

井戸の位置は図2を参照。A-Bは断面の位置。

(2) 井戸の形態

下位の泥岩と上位の石灰岩の不整合面から湧き出る地下水を、幅約1.2 m、高さ約0.5 mの小さな土手で堰き止め、そこから長さ約2.3 mの吐水石^{とすいせき}龍頭^{りゅうず}で導水し、貯水槽へ注いでいる。貯水槽は一辺が約1.8 mの正方形で、深さは約1.3 mである。満々と湛えられた水は清浄で、心が洗われる気分にさせられる。

溢れ出る水は、瑞泉門へ向う石段の下にある排水溝へ流れ出ている。四段の石段の下にある踊場は、奥行き0.7～1 mで、幅は約2 mと狭い。

(3) その他

吐水石龍頭は、高位であった沢峠^{たくし せいり}盛里が慶賀使として中国へ渡った際、1523年に持ち帰り、水吐口に取り付けたと伝えられる、龍樋から流れ出る水は“瑞泉”^{ずいせん}と称され、王府時代、冊封使^{さっぽうし}が滞在している間は、朝夕ここから水を汲んで天子館に搬入し、使節の飲料に提供したと云う。龍樋の周囲には、冊封七碑^{さっぽうしちひ}と称される七基の龍樋の碑が建てられている。

2. 右掖門下の寒水川 樋川^{うえきもん すんがーひーじゃー}

(1) 所在地

那覇市首里城公園内

寒水川^{すんがーひーじゃー} 樋川^{きゅうけいもん}は、久慶門から右掖門^{うえきもん}へ向う階段の脇に位置し、龍樋と同様、泥岩と琉球石灰岩の不整合面から湧出する地下水を集め、樋川^{ひーじゃー}から出している（図4）。

(2) 井戸の形態

長さ約1 mの樋川^{ひーじゃー}から流れ出る水を溜める貯水槽は、幅約2.6 m、奥行き約2.4 m、深さ約2.6 mの規模で、周囲はすべて石垣である。貯水槽の周囲は幅0.5 m前後の平坦な場所で、幅約0.4 mの樋川が置かれている場所の幅は約0.7 mである。樋川は比高約4 mの崖の基部に置かれ、崖の地質は自然のままの琉球石灰岩である。貯水槽の前面に広がる踊場は石畳が敷か

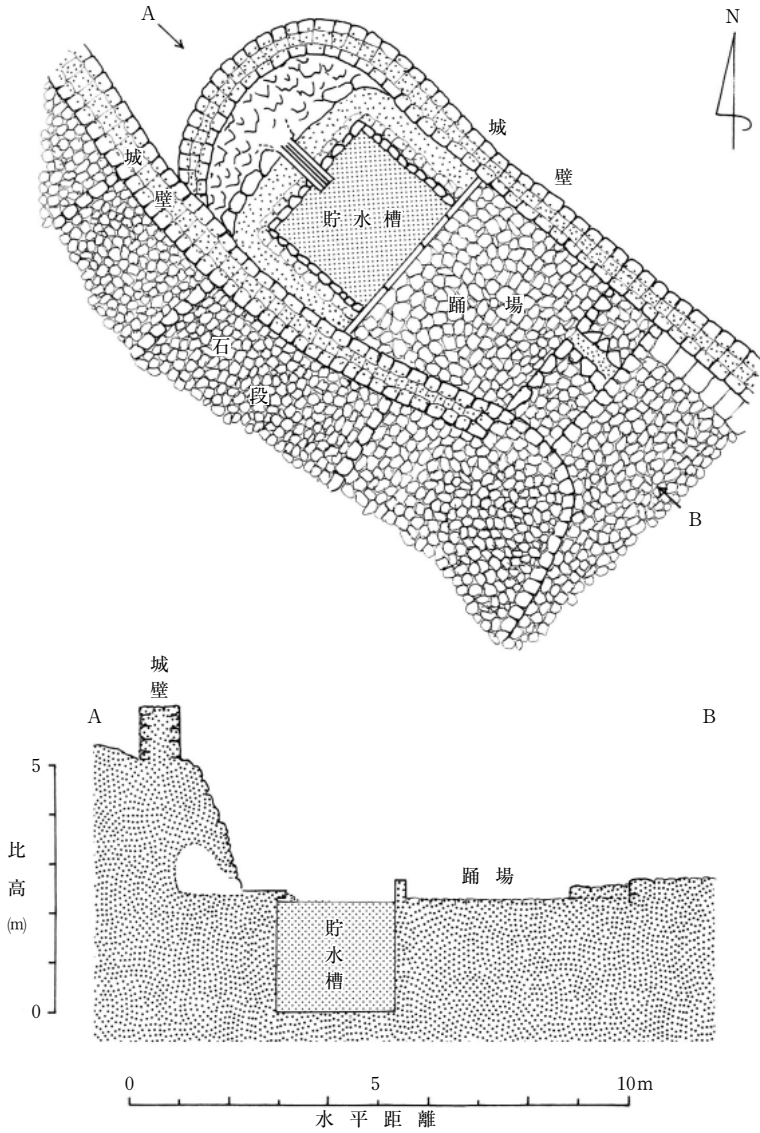


図4 寒水川樋川の形態

井戸の位置は図2を参照。A-Bは断面の位置。

れ、一辺は約4 mの広さとなっている。

(3) その他

龍樋や寒水川樋川などから流れ出た水は、城跡の北側で斜面を流れ下り、1425年に設けられた龍^{りゅうたん}潭池や、1493年に造られた円^{えんかん}艦池へ注いでいる(図2)。なお、首里城内からは中国製陶磁器・須恵器・フェンサ上層式土器、あるいは石斧などが採取されていると伝えられることから、これらの湧水地を中心とした一帯では、首里城が構築される以前から、人々が集落を作って生活していたと考えられる。

Ⅲ. 末吉宮跡南麓の古井戸

1. 宮跡付近の地形と地質

末吉宮跡は、安^{あじやがわ}謝川を挟んで首里城の北側に聳える丘陵上に位置する(図1)。丘陵地は東西方向に延び、稜線は標高50～107 mの高さである。丘陵地の地質は、下部は主として泥層やシルト層からなる鮮新世の島尻層群(豊見城層)で、その上位に更新世中期の那覇層(未固結の琉球石灰岩)が堆積し、スカイラインを形成している(図5)。島尻層群と琉球石灰岩の境界は比較的明瞭で、琉球石灰岩が急斜面を造っているのに対し、島尻層群の分布範囲は相対的に穏やかな斜面である。石灰岩堤の下位には、数段の段丘面状の平坦地が分布し、古井戸は段丘面の直下に位置している。

2. 末吉西ヌカー

(1) 所在地

那覇市首里末吉町二丁目117番地

急傾斜地(段丘崖)を奥行き約6 m、幅約6 mの平面形に掘り込んだ状態で、階段になっている通路とは、幅約1 mの石垣で隔てられている。村^{むら}

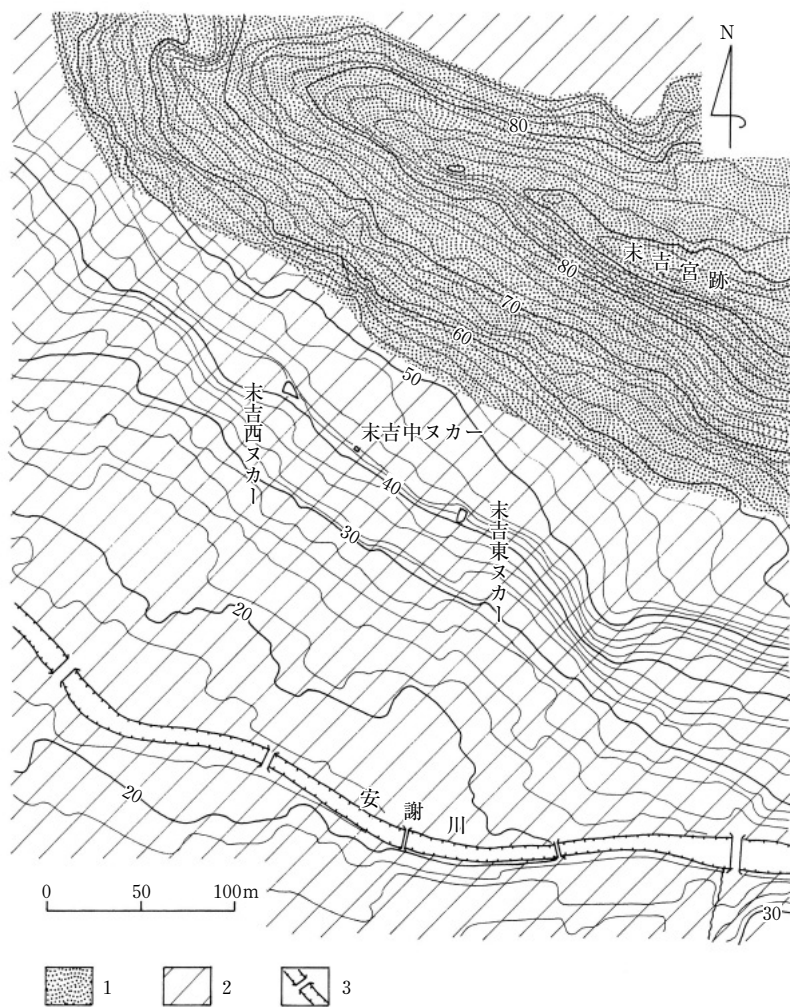


図5 末吉宮跡南麓の地形

1. 石灰岩堤 2. 一般丘陵斜面 3. 河川および橋
図内の細線は等高線 (単位: m)。

井戸で、名称は集落の西側に位置することに由来すると云う。

(2) 井戸の形態

地下水は段丘崖下に穿たれた奥行き約1.5mで、ヒョウタン型をした湧泉から流れ出、湧水口の脇には香炉が置かれている（図6）。湧水の前に

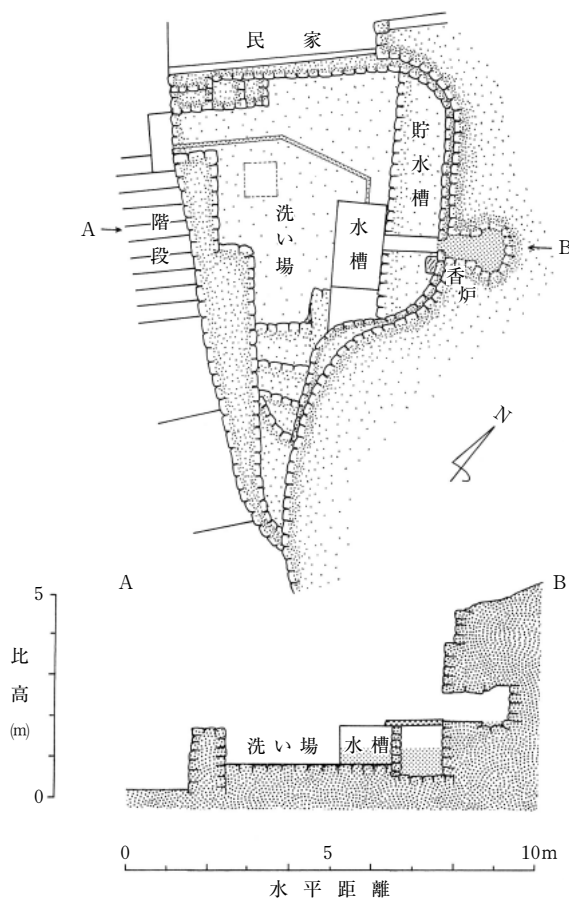


図6 末吉西ヌカーの形態

井戸の位置は図5を参照。A-Bは断面の位置。

は、幅約6 m、奥行き1 mで、高さ1 mの石垣で囲まれた貯水槽があり、コンクリート製の蓋で覆われている。

(3) その他

^か井戸の周囲は、合方積みの石垣となっている。湧泉内部も石組となっていることから、井戸を構築するに先立って、まず段丘崖を大きく掘り崩し、湧水箇所にヒョウタン型の石組を築いて湧泉を設けた。その後、曲線美が美しい合方積みで段丘崖を覆い、その前に貯水槽や洗い場などを設置したと考えられる。

那覇市教育委員会(1986)によると、1985年に調査が行われた頃、日湧水量は23.4m³あったと云う。

3. ^{すえよしな}末吉 中ヌカー

(1) 所在地

那覇市首里末吉町二丁目124番地

^{すえよし}末吉西ヌカーから南東方向へ約50m離れた場所で、末吉西ヌカーと同様、比高約5 mの段丘崖下に位置している。付近には琉球石灰岩が散在していることから、段丘面の各所にも石灰岩層が堆積し、下位の難透水層となっている豊見城層との不整合面から、地下水が湧出していると考えられる。那覇市教育委員会(1986)によると、戦前から雨期以外は、湧水はなかったようである。

(2) 井戸の形態

踊場より約1 m高い位置に、幅約1 m、天井の高さ約1 m、奥行き5～6 mの横穴を穿った構造で、いわゆる横井戸である(図7)。湧出した地下水を出口で滝のように落とし、入口の一部には、長さ約20cmの樋の一部が残っている。井戸の一部には、深さ約1 mの排水溝が設けられ、湧水の脇には香炉が置かれている。

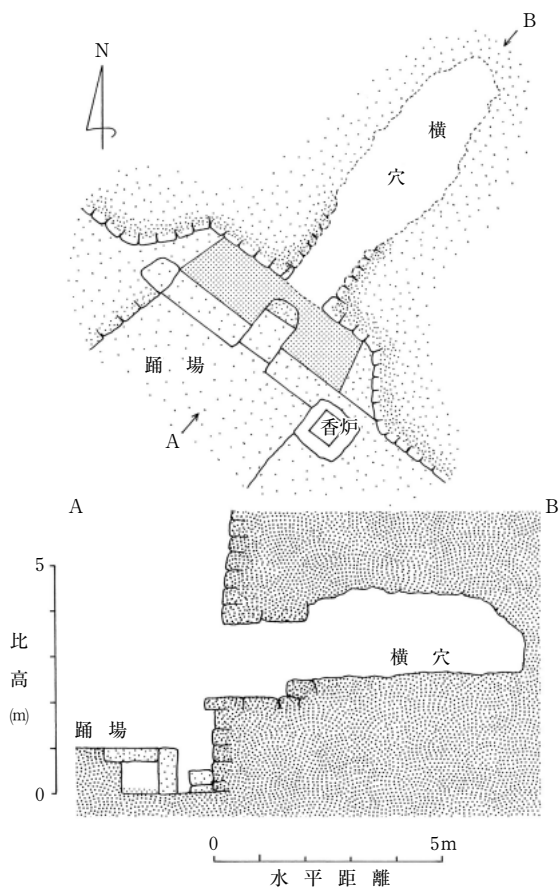


図7 末吉中ヌカーの形態
井戸の位置は図5を参照。A-Bは断面の位置。

(3) その他

入口付近から約1.5m奥付近までは、壁面全体が石組であることから、この湧水も井戸を設置する前に段丘崖を削り崩し、合方積みの石垣で湧泉を囲んだ後、表面の石垣を築いたと考えられる。現在、湧水は見られない

が、長さ約20cmの樋の前面には、桶などの容器を置くようなタタキ構造になっていることから、かつては大量の湧水があったと推定される。しかしながら、井戸の上方にあたる段丘面上に道路が建設されるなど、涵養地一帯の土地利用が変わったため、地下水の湧出が途絶えたのであろう。

4. 末吉 東ヌカー

(1) 所在地

那覇市首里末吉町二丁目113番地

^{すえよしな-か}末吉 中ヌカーから南東方向へ約70m離れた位置で、比高約5.5mの段丘崖下にある。段丘崖下は幅約13mと広いので、その一部を掘り崩して急崖とし、その前面に井戸と踊場を設けている。上位の段丘面からは、幅1.5～2mの階段が続いている。^{むら が -}村井戸で、名称は集落の東側に位置することによって由来すると云う。

(2) 井戸の形態

地下部の湧泉は幅約0.4m、天井の高さ約0.6m、奥行き約1.5mの規模で、この井戸も内部は石組みである（図8）。入口にはコンクリート製の貯水槽があり、屋根で覆われている。洗い場は最大幅約4m、奥行き約7mの広さで、床は石畳、周囲は合方積みの石垣である。洗い場の右手側には拝所が設けられ、香炉が置かれている。

(3) その他

構造や洗い場の規模などから、この井戸もかつては豊富な湧水があったようである。この井戸でも湧水が涸れてしまったのは、涵養源となっていた段丘面上の一角が、道路の開通などの開発によって変化したためと考えられる。

那覇市教育委員会（1986）によると、1985年に調査が行われた頃、日湧水量は0.1m³あったと云う。

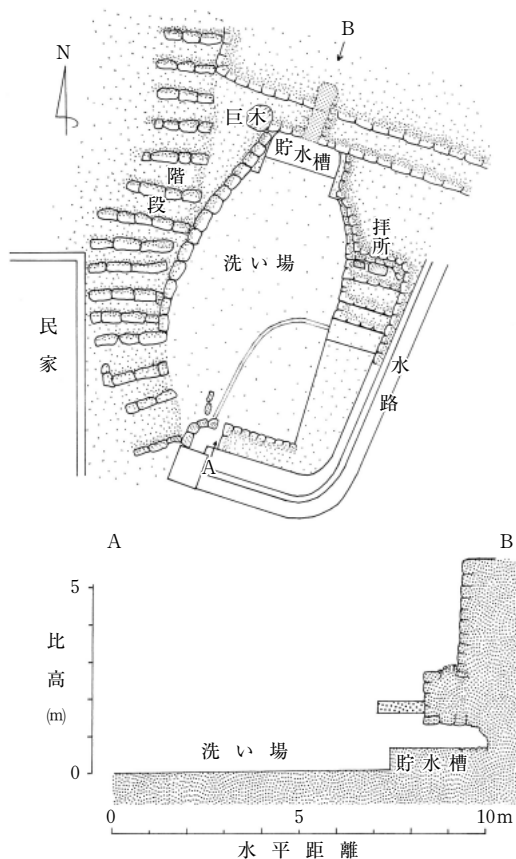


図8 末吉東ヌカーの形態

井戸の位置は図5を参照。A-Bは断面の位置。

Ⅳ．首里丘陵北麓の古井戸

首里丘陵の北西麓は、^{あじゃがわ}安謝川によって形成された緩傾斜の谷壁で、標高100m前後の段丘面をはじめとして、全部で七段の段丘面からなっている(図9)。それぞれの段丘崖の比高は2～5mであるが、段丘面の配列には

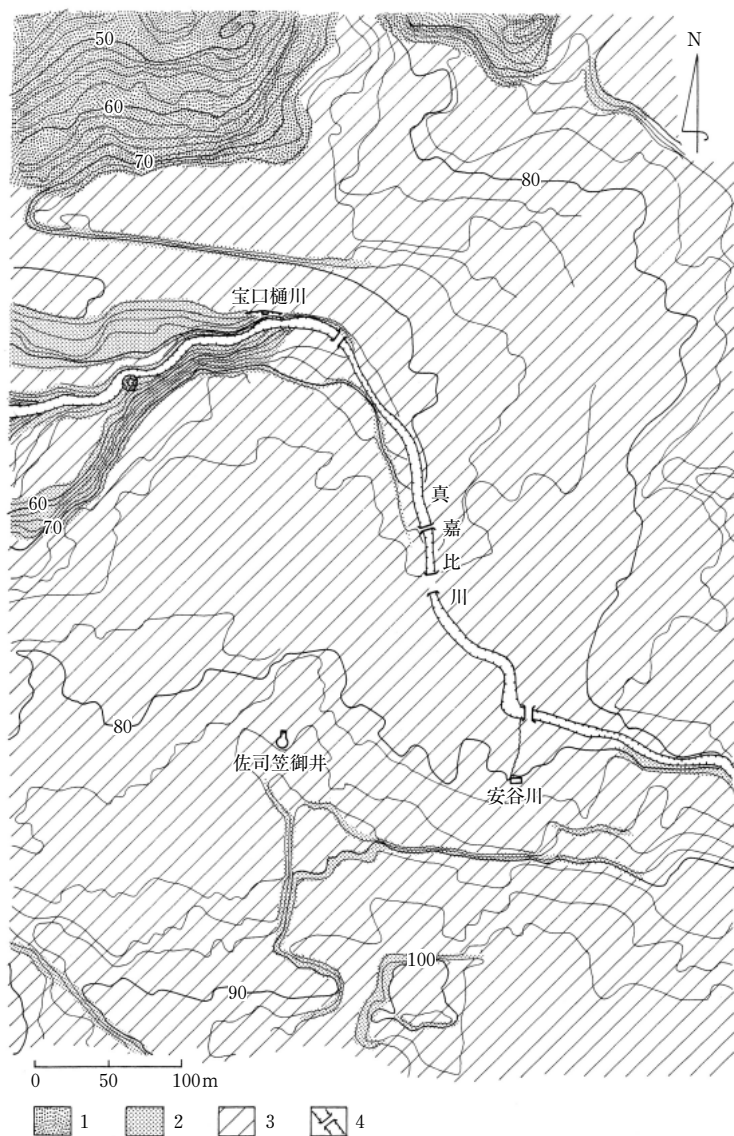


図9 首里丘陵北麓の古井戸

1. 石灰岩堤 2. 段丘崖 3. 一般丘陵斜面 4. 河川および橋
図内の細線は等高線 (単位: m)。

規則性がない。かつては緩傾斜地であったが、第二次世界大戦時に付近一帯は大規模な艦砲射撃を受け、地形は大きく変わったと伝えられる。このことから、戦後の復興の際、住宅地や耕作地を得るため、現在のような段丘状の地形になったとも考えられる。

付近の地質は主として未固結の泥岩層（豊見城層）で、上位を層厚数mの琉球石灰岩が覆っている（沖縄県，1994：氏家ほか，2006）。そのため、平坦面（段丘面）を侵食する谷の壁面や谷頭部では、両地層の不整合面から各所で地下水が湧出している。

1. 宝口 樋川^{たからぐちひーじゃー}

（1）所在地

那覇市首里儀保町四丁目80番地

（2）井戸付近の地形と地質

樋川が面する真嘉比川の源流は、首里城が位置する石灰岩堤と崎山石灰岩堤^{まかびがわ}の間の平坦地にある。崎山 樋川^{さきやまひーじゃー}などからの流水を集めて流れ下り、首里丘陵を大きく迂回するような状態で北西から西方へ向かい、さらに南西方へ向かって松川^{あさとがわ}で安里川^{たからぐちひーじゃー}に合流する。宝口 樋川は真嘉比川が北西から西方へ向きを変える途中で、流路の右岸（北岸）に位置している。全体的に見ると、付近は標高70～80mの段丘面で、真嘉比川は段丘崖を下刻する遷急点付近に当たっている。

宝口樋川の近くでは、真嘉比川に沿って河床から5 m前後で、樋川とほぼ同じ高さに、下位の砂岩と上位の琉球石灰岩の不整合が見えることから、樋川から流れ出る地下水は、不整合面から湧出していると考えられる。

（3）井戸の形態

真嘉比川が作る段丘崖の中腹に位置する宝口樋川は、段丘崖に沿って細長く、延長約10m、幅約4 mの、狭長な平面形である（図10）。段丘面からの小路は坂道で、大通りから樋川へ向かう小路の入口には拝所^{うがん}が置かれ、

また往来する人々の安全を確保するため、小路と真嘉比川との間には築堤が設けられている。小路は途中からは階段になり、階段の数は七段で、その下位は踊場となっている。

宝口樋川は、段丘崖の中腹から湧出する地下水を、樋川を通して落す構造である（図10）。湧出口は2か所あるが、階段の脇にある方は破損して

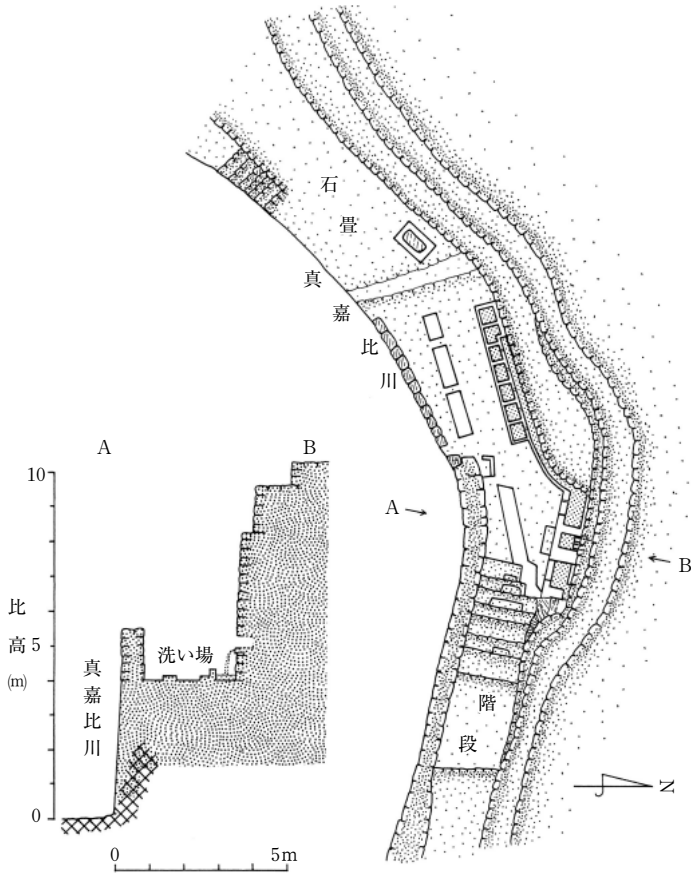


図10 宝口樋川の形態

井戸の位置は図9を参照。A-Bは断面の位置。

いる。合方積みの石垣で覆われている段丘崖から突出している樋川は、幅約30cm、長さ約25cmで、地下水の湧出口から数cm上位には、香炉が設けられている。樋川と踊場との比高は約1mで、樋川から約0.95m下には、幅約0.4m、奥行き0.6m、深さ0.2mの主貯水槽があり、そこから合方積みの石垣である段丘崖に沿って下流の方向へ、幅約0.2mの流水溝が延び、その先には七つの副貯水槽が並んでいる。これらの貯水槽の前はコンクリート張りで、細長い平面形の洗い場となっている。飲料水用と洗濯用水に分けたのは、昭和初期だと云う（当間，1981）。

副貯水槽がある洗い場の西端には幅約0.5m、深さ数cmの仕切り溝があり、その西側は石畳が敷かれている。石畳の一部からは真嘉比川の河床へ降りる、幅約0.7mの石段が設けられている。真嘉比川を流れる現在の流水は悪臭を漂わせているが、かつては流水で野菜を洗い、あるいは洗濯などをしたことであろう。

（４） その他

立派な合方積みの石垣で覆われた段丘崖下には、^{たからぐちひーじゃーのひもん}「宝口樋川之樋文」の複製が立てられている。それによると、この樋川は嘉賀12（1807）年に、^{とうのくらむら みやぐすくちく どう ん べーちん}当蔵村の宮城筑登之親雲上が中心となり、24名が資金を出し合って、湧泉に樋を設け、段丘崖を切り開いて道路を建設した。樋川が竣工すると、人々はその水を賞味し、様々な活用したと云う。また王朝時代には、樋川から湧き出る豊富な地下水、あるいは付近の地下水を利用して紙漉業が盛んであった。大正時代には衰退したというが、それでも50戸内外が紙漉業を行っていたと云う（上江洲，1981）。上述した踊場一帯の設備は、昭和初期に整備されたと記録されている。

那覇市教育委員会（1986）によると、1985年に調査が行われた頃、日湧水量は108.3m³あったと云う。

井戸の入口には説明板が立てられ、下記の文章が書かれている。

宝 口 樋 川

市指定史跡 指定 1976（昭和51）年 9 月28日

宝口樋川は、真嘉比川沿いの急な崖下に設けられています。そのため、背後は沖縄独特のあいだ積みと呼ばれる石積みで、極めて頑丈につくられています。樋の前は、石畳になっています。現在あるコンクリートの水槽は、飲料用と洗濯用に水を分けたもので、昭和初期につくられました。もとは入口にあった「宝樋」碑によると、1807年、この樋川をひいたのは当蔵村の平民たちで、その功績によって階位を賜り、その後1842年に大修理を加えた赤田村の平民宮城は、士分に取り立てられました。

かつてはジブガーフィージャーと呼ばれ、昔から豊かな水に恵まれ、干ばつにもかれることのない重宝な樋川でした。近年は樋川の背後が開発され、一時期より水量が落ちていますが、市内でも指折りの湧水をほこっていることに変わりはありません。

那覇市教育委員会

2. 桃原の佐司笠御井

(1) 所在地

那覇市首里桃原町十五丁目 3 番地

(2) 井戸付近の地形と地質

付近は七段ある段丘面のうち標高82～85m面で、佐司笠御井は北方へ穏やかに傾斜する段丘面の、ほぼ中央に位置する。背後には比高 1 mに満たない段丘崖が延びており、井戸はどこにでもあるような緩傾斜地を掘り込んで設けられている。

(3) 井戸の形態

井戸は、すべて切石を用いた、立派な合方積^{あいかたづ}みの石垣で造られている。平面形はシャモジ状で、地表面と踊場を往来する通路は、握り手の部分に当たる位置に設けられた石段になっている（図11）。幅約2.3m、延長約7mの広さで、階段は全体で十八段である。踊場は階段の入口から約4m低く、直径は約4.8mである。階段や踊場は、壁面が崩落しないよう、合方積みの、三段の石垣となっている。

踊場の奥部には、幅約70cm、高さ約1mの横穴があり、その約1m奥部は、直径約1.8mの空間となっている。地下水は空間部の基底にあるスキ間から湧き出し、床に作られた凹地に溜まった後、樋を通して踊場の一部に設けられた貯水槽に流入している。

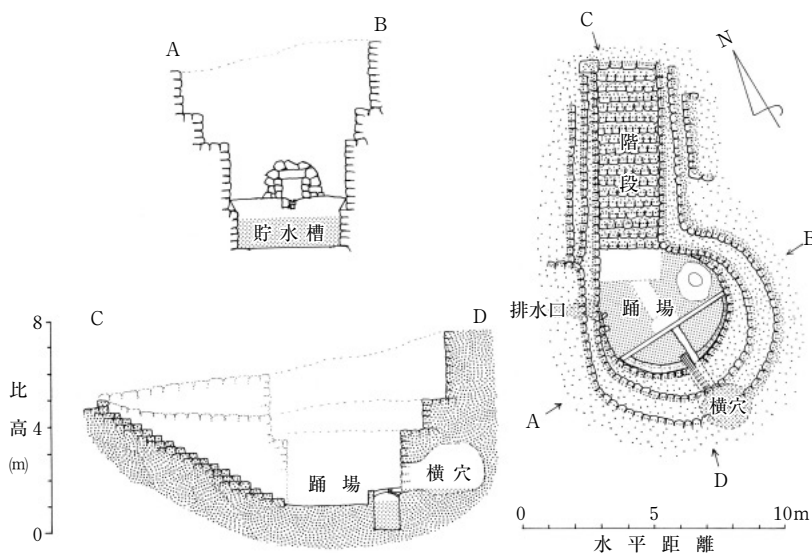


図11 佐司笠御井の形態

井戸の位置は図9を参照。A-B、C-Dは断面の位置。

(4) その他

井戸が位置している松山御殿は、かつては第3代琉球国王である尚真王の王女であった、佐司笠^{さしかさんじ}按司の御殿であったと云う。そのため、佐司笠^{ろせん}井は「驚泉」とも称される。福島（1987）は1447年から1526年までの間に設けられたと推定しているが、『球陽』巻3の尚真王48（1513）年の項に、「佐司笠^{あじがなし}按司加那志、始めて清泉を掘る」とあることから、1513年に、付近では最初に設けられたと考えられる。

庭園内には佐司笠御井から約10m離れた位置にも、世界報御井^{ゆがふううかくあー}小と称される小規模な御井^{うーかー}があり、地表面と井戸を往来する小路は昔^{んかしいみち}石道と称されている。

入口には説明板が立てられ、下記の文章が書かれている。

佐 司 笠 樋 川^{さ し かさ ふいー じゃー}

当邸は第三代琉球王朝・尚真王（1477～1526）の王女・佐司笠^{さしかさんじ}按司^{あんじ}の御殿として築造されました。その頃、当所にアコウの大樹があり、いつも多くの白鷺が舞っていました。それを見た按司は「水鳥の来るこの場所にはきっと清泉があるに違いない」と掘ったところ、果たして清泉が湧き出し「佐司笠樋川」と呼ばれるようになりました。古来、水が尊ばれる沖縄で、この樋川は神格化され、今も各地から参拝者が絶えません。

3. 大中の安谷川^{おおなか あだにがー}

(1) 所在地

那覇市首里^{おおなか}大^{ひーじゃー}中^{ひーじゃー}町一丁目61番地

この樋川は、佐司笠樋川から東方へ、直線で約160m離れた窪地に位置している（図9）。周辺の地形は大きく改変されているが、樋川はかつての小沢の谷頭付近に設けられていると考えられる。

井戸は、首里城と浦添城を結ぶ表通りから、延長約12m、幅1.7mから1.9m、比高約3.6mの階段を下った踊場の前に位置し、かつては、首里へ向かう人馬の休息地であったと伝えられる。近くには、高位の^{しゅりおおあむ}首里大阿母志良礼^{しられ}と言われるノロ（神女）が祭祀を司ったと伝えられる、^{やすたにがーたき}安谷川嶽が位置している。

（２） 井戸の形態

踊場は幅約2.8m、奥行き約6mの広さで、向かって左手側には貯水槽があり、コンクリート製の屋根に覆われている（図12）。井戸の主体である貯水槽は、幅約3.2m、奥行き約1.2mの広さで、踊場との間にはコンクリート製の仕切りが設けられ、踊場の床面からの深さは約77cmである。屋根の背後には石垣が築かれ、貯水槽の底からの比高は約5.3m、屋根からの比高は約2.6mである。貯水槽の脇には、御香炉を載せる石台が置かれ、

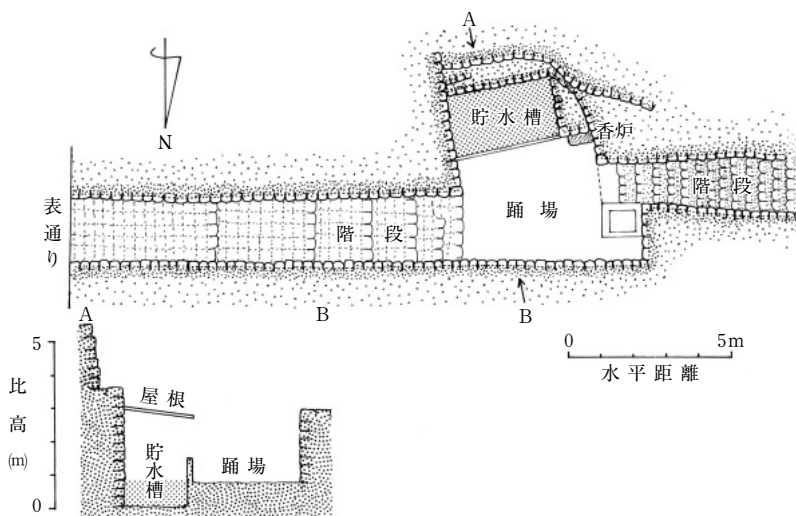


図12 大中の安谷川の形態

井戸の位置は図9を参照。A-Bは断面の位置。

新しい御供え物が奉されていることから、現在でも水神信仰が行われていることが分かる。一方の、右手側は直線で、こちらも比高約2.3mの合方積みの石垣で、石垣の上には家屋が建てられている。

このように、^{あだにがー}安谷川と称される井戸は、貯水槽を中心として、両側は船底状の窪地で、左右は合方積みの石垣となっており、石垣の上には家屋が建てられている。このような状態から、石垣が築かれる以前、付近は安谷川と称される浅皿状の谷地形があり、底には小川が流れていたのを堰き止め、井戸として利用されていたと推定される。その後、井戸の邪魔にならないような状態で、上流側に合方積みの石垣が築かれ、さらに下流側にも合方積みの石垣が築かれ、現在の状態になったのであろう。

(3) その他

井戸の入口には説明板が立てられ、下記の文章が書かれている。

安 谷 川

那覇市文化財指定史跡 指定 昭和53年11月14日

川は井戸の意、地域の共同井戸であった。この井戸に東接する坂道一帯の地域も「安谷川」とよぶ。

〈安谷川〉の所見は15世紀中ごろ古謡「屋良くわいにや」に出ている。坂道は浦添え方面から首里城に至る古くから発達した要路で、この道を通ってきた地方の人々もこの井戸で手足を洗い、身だしなみを整えた。井戸口は長方形で大きく造られ、井戸端も広く、多くの人の水汲みに便利である。石積みも沖縄独特の〈あいかた積み〉で精巧に美しく積まれている。くぼ地に掘られた井戸であるが排水もよく考慮され北隅に長い四角の大きな暗渠がつくられ、北接地の地下2 m～3 mの深さをくぐり、約50m離れた河川に排水している。

那覇市教育委員会

V. 首里丘陵南麓の古井戸

首里城が位置する丘陵地の稜線付近には、琉球石灰岩が分布しているが、安里川に面する南側斜面は、半固結の主として泥岩やシルト岩からなる、豊見城層の分布範囲である。斜面の各地に小規模な湧水が分布し、いくつかは合方積みの井戸となっている。

1. 松川 樋川^{まつがわひーじゃー}

(1) 所在地

那覇市字松川

(2) 井戸付近の地形と地質

首里城が位置する丘陵地の山頂から西方へ延びる稜線付近で、尾根の南側斜面に位置する（図13）。稜線付近は比較的穏やかな斜面であるが、その下位には比高12～14mの急斜面となっており、樋川は遷急点の下部で、標高は約36mである。付近の状態から、湧水は主として泥岩からなる豊見城層内から湧出する地下水と考えられる。

(3) 井戸の形態

平面形は鍵穴状である。入口から2段の階段を下った所に広がる踊場は、幅約1.2～2 m、延長約3.5mと細長く、両側は立派な布積み^{ぬのづ}（豆腐積み^{とうふづ}とも言う）の石垣となっている（図14）。貯水槽は半円形で、間口約1.9m、奥行き約1.5m、深さ約0.3mの規模である。奥部は二段の張り出しとなっており、地下水は下位の張り出しから湧出し、樋から落ちているが、水量が多い時には貯水槽から約1.5m高い上段の樋口から、地下水が音を立てて落ちる。貯水槽の両側には、それぞれ香炉が置かれている。

(4) その他

踊場や張り出しなどの構造は、実用的ではなく装飾的であることから、

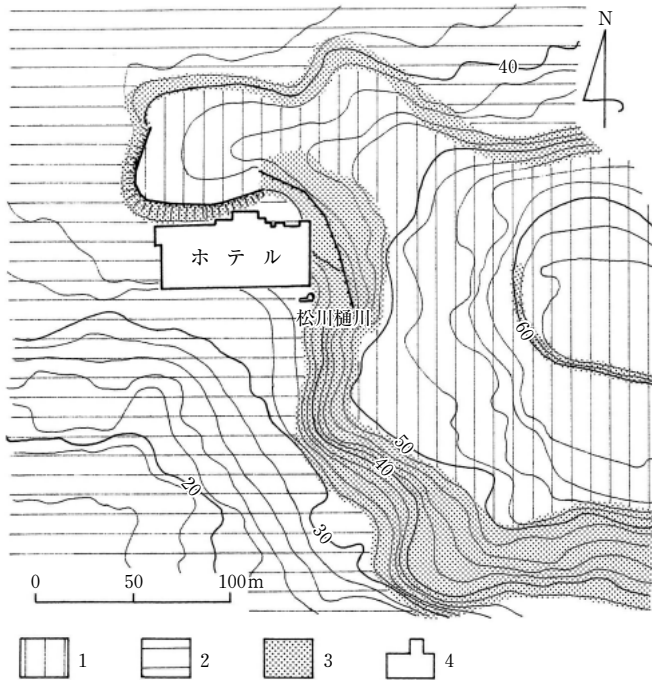


図13 松川樋川付近の地形

1. 中位段丘面 2. 下位段丘面 3. 段丘崖 4. 建物
図内の細線は等高線（単位：m）。

この樋川は地域住民が生活用水を汲んで利用した村井戸^{むらがー}ではなく、御殿などの庭園の水場として設けられたと考えられる。上段の樋口から音を立てて落ちる湧水は、滝が少ない那覇では、珍しい風景であったことであろう。

2. 寒川の寒川 樋川^{さむかわ すんがーひーじゃー}

(1) 所在地

那覇市首里寒川町一丁目54・55番地

(2) 井戸付近の地形と地質

この樋川^{ひーじゃー}は、首里城の南側斜面に位置し、城からは直線で約200m離れ

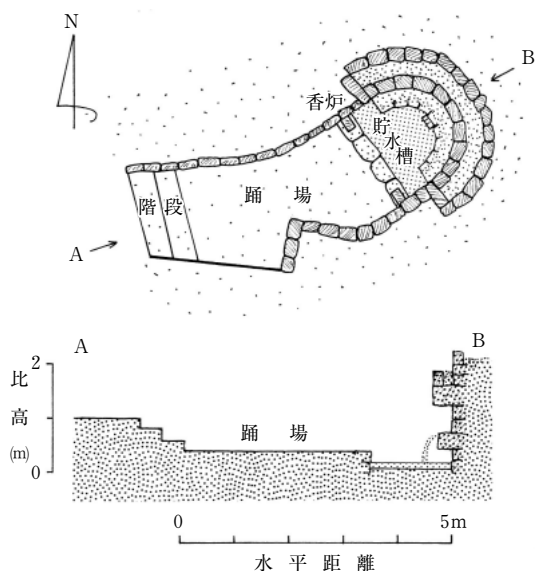


図14 松川樋川の構造

井戸の位置は図13を参照。A-Bは断面の位置。

た位置にある。付近の地形は数段の段丘で、^{すんがーひーじゃー}寒川 樋川は標高60～80m面の、段丘崖の中腹に源を発する小沢の谷頭に設けられている（図15）。地質は未固結の泥岩層（豊見城層）である。

那覇市教育委員会（1986）によると、1985年に調査が行われた頃、日湧水量は40.2m³あったと云う。

（3）井戸の形態

段丘崖の中腹に設けられているため、前面は湾曲した合方積みの立派な石垣である（図16）。三段からなる石垣の比高は約5.2m、地下水は最下段に設けられた樋口から湧き出ている。貯水槽は幅約3.5m、奥行き約1.7mで、石垣の下は両翼とも隅丸型になっており、湛水深は数cmである。底には丸石が敷き詰められているが、溜まっている水が清浄であることを暗示

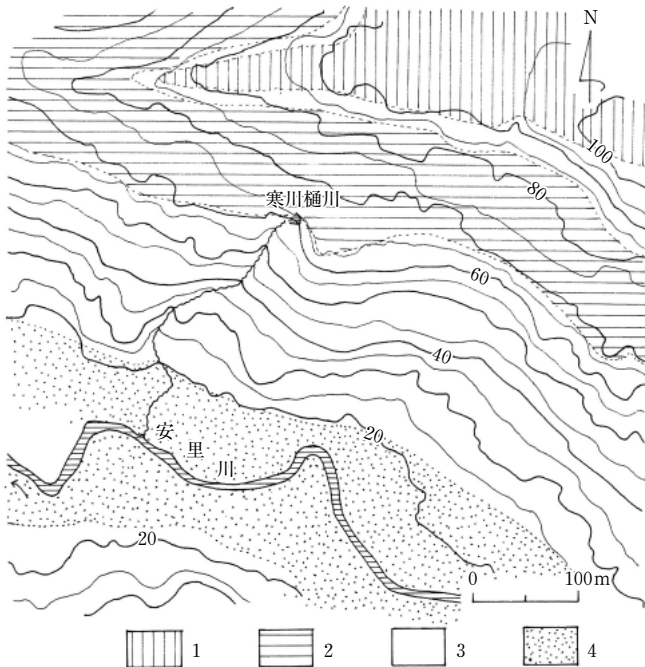


図15 寒川樋川付近の地形

1. 中位段丘面 2. 高位段丘面 3. 段丘崖 4. 沖積低地
図内の細線は等高線（単位：m）。

しているであろう。向かって右端には、貴重な湧水の恵に感謝するための拝所^{うがん}が設けられている。踊場はコンクリート張りで、幅約4.5m、奥行き約3.5mの広さとなっている。道路が位置する段丘面から踊場へは、幅約1.5mの階段が設けられている。

（4） その他

設置された時代などについての資料はないが、井戸の規模から、古くから住民たちにとっては貴重な村井戸^{むらがー}であったと推定される。井戸の入口には説明板が立てられ、下記の文章が書かれている。

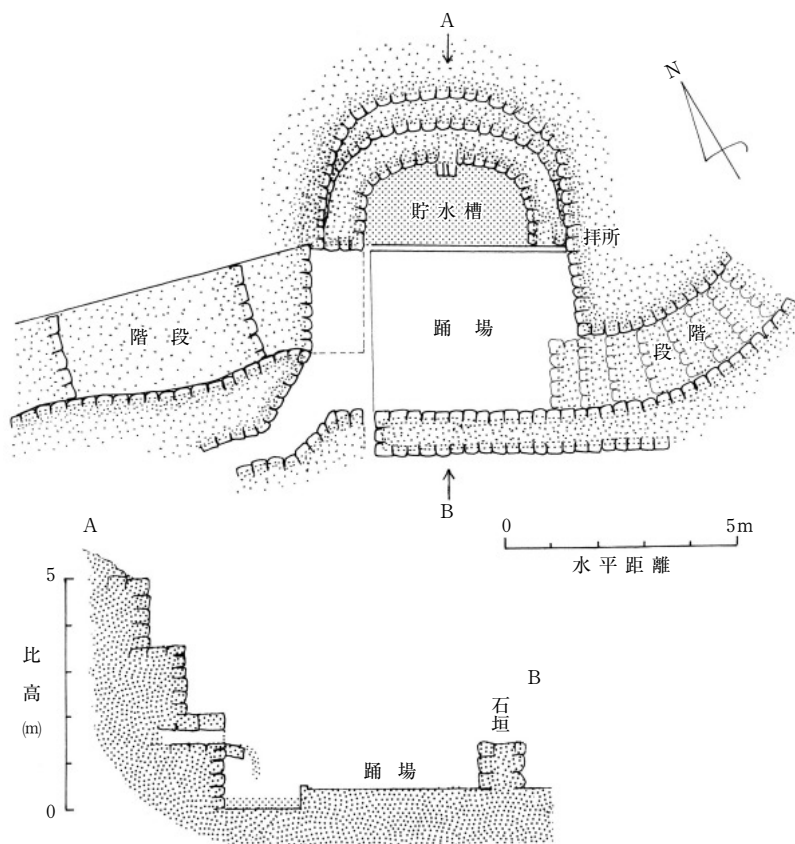


図16 寒川樋川の形態

井戸の位置は図15を参照。A-Bは断面の位置。

寒 川 樋 川

寒水川とは清水の湧く井泉の意味で、樋川とは湧き水をかけた樋で引いた井泉の形式をいう。この地名寒水川（旧寒水川村）はこの井泉にちなんでつけられたといい、首里でも古い町のひとつである。井泉の樋から落ちる水は飲に、下の水そうに

ためた水は台所用に、さらに水路によって下方に導き大きな水
そうにためた水は洗濯その他の用水とし、あまって流れ出る水
は田畑にそそいでいる規模の大きい井泉である。水質水量とも
にすぐれ、戦前放送局（NHK）が放送の水として利用した。
井泉の上方は□□□、□□と井泉の広場は石畳となっており、
井泉の石。

水を大切にする古い地域の風俗が良く残されている。

指定 昭和54年7月3日 那覇市教育委員会

かなぐしくうふひーじゃー

3. 金城大樋川

(1) 所在地

那覇市首里金城町二丁目8番地

(2) 井戸付近の地形と地質

首里城が位置する丘陵地の南側斜面で、標高55m付近に位置する(図17)。
東方へ約60m離れた標高約70mにある樋川内金城御嶽付近には、比高10
m以上の琉球石灰岩層が露出し、その下位には豊見城層のシルト層である
ことから、この大樋川は島尻層群内の地下水が湧き出ていると考えられる。

(3) 井戸の形態

貯水槽を三方から取り囲むような平面形で、合方積みの石垣は三段で、
床面は幅約5.5m、奥行き約12mの広さである(図18)。中央の貯水槽は半
円形で、間口の幅は約4m、奥行き約2.3m、深さ約0.4mの規模である。
底には直径数cmの玉石が敷き詰められており、水が常に清浄であることを
願って敷き詰められていると云う。貯水槽に注ぎ込む湧水は、約1.2m離
れた二本の樋から流れ込み、樋の間には湧水の恵を誇示するような状態で
香炉が置かれている。香炉へは、両側から往来が出来るよう、通路が設け
られている。

踊場は幅約4m、奥行き約3.6mの広さで、石畳となっている。石畳の

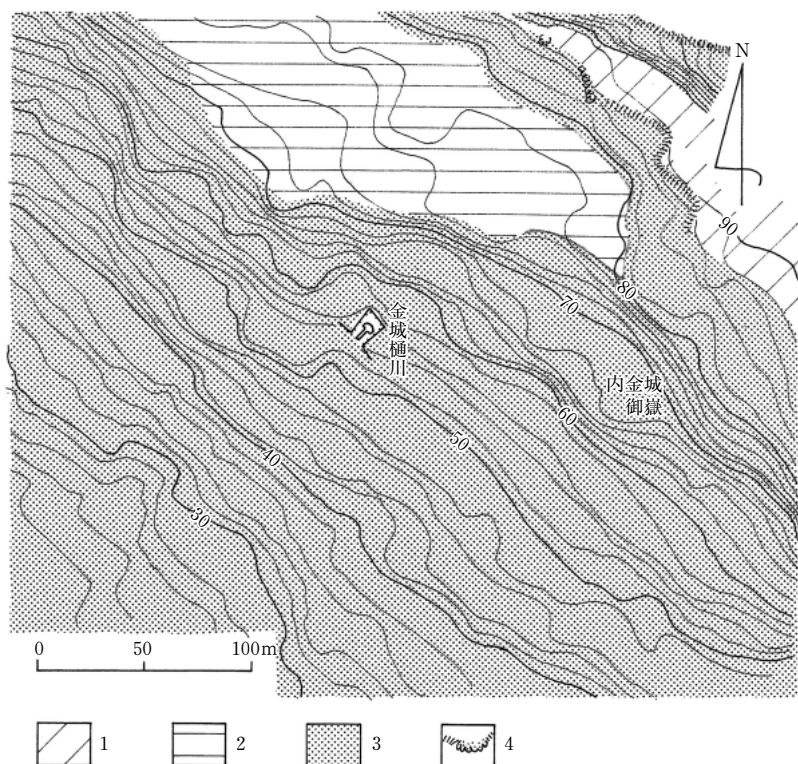


図17 金城樋川周辺の地形

1. 一般丘陵斜面 2. 中位段丘面 3. 段丘崖 4. 急崖および露岩
図内の細線は等高線 (単位: m)。

中央からは南側の道路へ向かって、幅0.9～1.2mの排水路が延び、排水路の両側は道路へ向う石畳の通路である。踊場と排水路の接合点付近からも、地下水が湧き出ている。ここは、洗濯など物を洗う水場として利用されたのであろう。この樋川においても、付近の開発によって近年、湧水量が減少したと言われるので、往時は、二本の樋を中心に、踊場の各所から地下水が豊富に湧出していたと推定される。

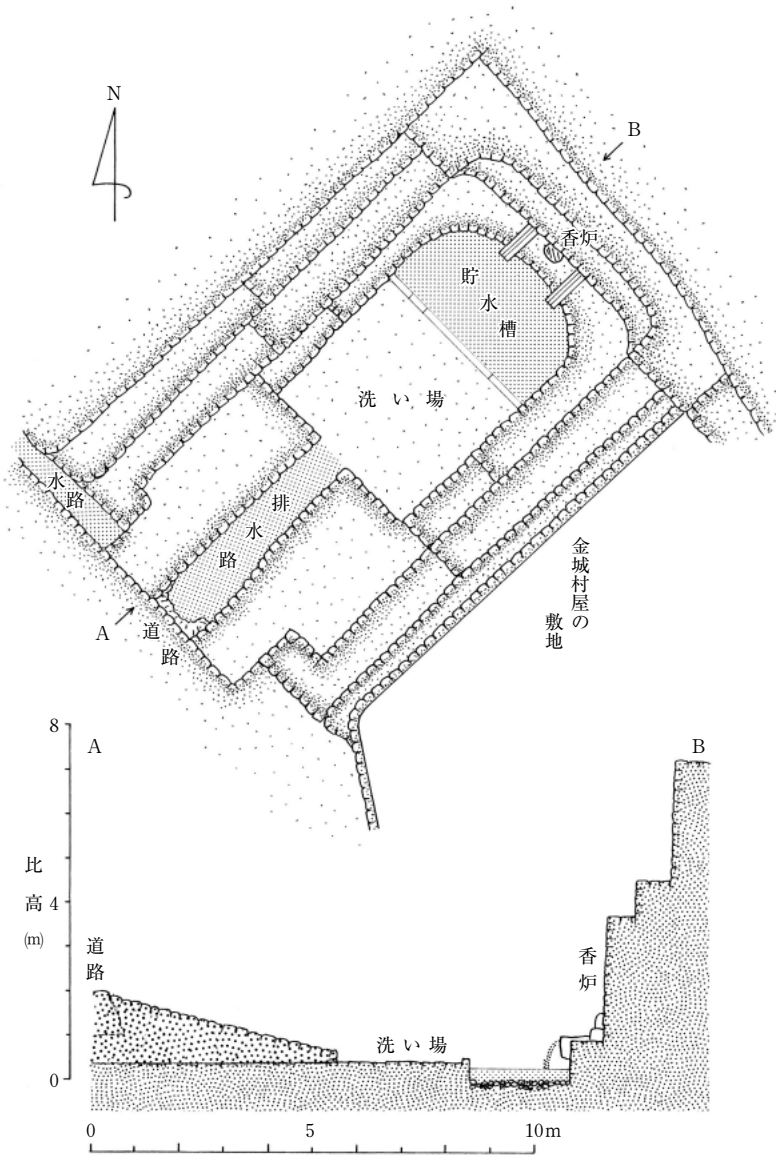


図18 金城樋川の形態
井戸の位置は図17を参照。A-Bは断面の位置。

(3) その他

付近一帯では、古くから集落が成立していたと伝えられるため、大樋川^{うふひーじゃー}は村井戸^{むらがー}であったと考えられる。成立した時代などの詳細については不明であるが、近くにある内金城御嶽^{うちかなぐしくうたき}の史料として、『球陽』の尚質13(1660)年の記事によると、「それまで大嶽には拝殿がなかったので、邑人が公儀の許しを得て、拝殿を創設した。」とある。また尚泰王16(1863)年の項には、修理をしたとの記録がある。大樋川^{うたき}と御嶽の間にあって、北東—南西方向に延びる「首里金城町石畳道」と称される坂道は、かつては首里城と島尻地方を結ぶ幹線道路であった。大樋川は湧出量に恵まれていたため、王朝時代は国王一行の休息地になっていたと云う。また、一帯では、王府の厳重な管理・統制による御用酒造りも行われていたようである。さらに、尚貞18(1686)年頃、大見武憑武^{おおみたけひょうぶ}がこの大樋川の水を使って、琉球では初めて紙を漉いたと伝えられる(上江洲, 1981)。すぐ近くには、古い琉球家屋の「金城村屋」^{かなぐしくむらやー}が再現されている。

このように、村井戸として古くから地域の人々と深く関わっていることから、那覇市の文化財に指定されている。

井戸の入口には説明板が立てられ、下記の文章が書かれている。

金 城 大 樋 川

市指定史跡 昭和52年4月8日

金城大樋川は金城村の共同井戸で、急な崖の下から2つのかけ樋で地下水を導き出しています。その前には約10m²ほどの石積みを敷き、半月型の貯水池を設けています。さらにその前には、石敷きの広場がつくられ、南側には排水溝があります。樋川の周囲の三方は土留めの石積みがなされ、特に背後は4段にわけてがっちりと積まれています。

東側の集会場のところは、かつてフィージャーモーと呼ばれ

た広場で、坂道を上下する人馬が樋川の水で喉を潤し、一息入れた場所でした。また広場から石畳道をはさんだ東側は、薩摩に学び沖縄で最初に和紙をすいた大見武筑登之親雲上おお み たけちく どう ん べーちんの屋敷跡で、17世紀の末ごろの樋川の水で、和紙がつくられたようです。

那覇市教育委員会

4. 崎山 樋川さきやまひーじゃー

(1) 所在地

那覇市首里崎川町一丁目

(2) 井戸付近の地形と地質

首里城公園の南東方には、標高110m前後の上位段丘面が広がり、南縁には段丘面より10～15m高い石灰岩堤が分布している（図19）。石灰岩堤は延長約500m、最大幅約150mの大きさで、首里城跡が位置する石灰岩堤とほぼ同じ規模である。石灰岩堤は保水性が良いため、大雨の後には各所で湧水が見られ、この崎山 樋川さきやまひーじゃーは湧水地の一つを、人工的に加工した井戸がーである。

(3) 井戸の形態

石灰岩堤の下に位置する井戸は半地下式で、貯水槽の平面形は一辺が約1.5mの正方形で、深さも約1.5mである（図20）。手前の踊場も一辺が約1.5mの広さで、踊場は地表面から約1.1m低く、その間は七段の石段となっている。貯水槽へは、石灰岩堤の下位で湧出した地下水が流れ込みやすくするため、幅約0.5m、高さ約1m、奥行き2m以上の横穴が穿たれている。

(4) その他

石灰岩堤の上には崎山御嶽が祀られ、高級ノロ（神女）の一人であった首里大阿母志良礼しゅりおおあむしられが参拝したと云う。伝えられるところによりと、「良い方向（恵方）が巳（南東）に当たる年には、元旦に国王へ献上する若水が

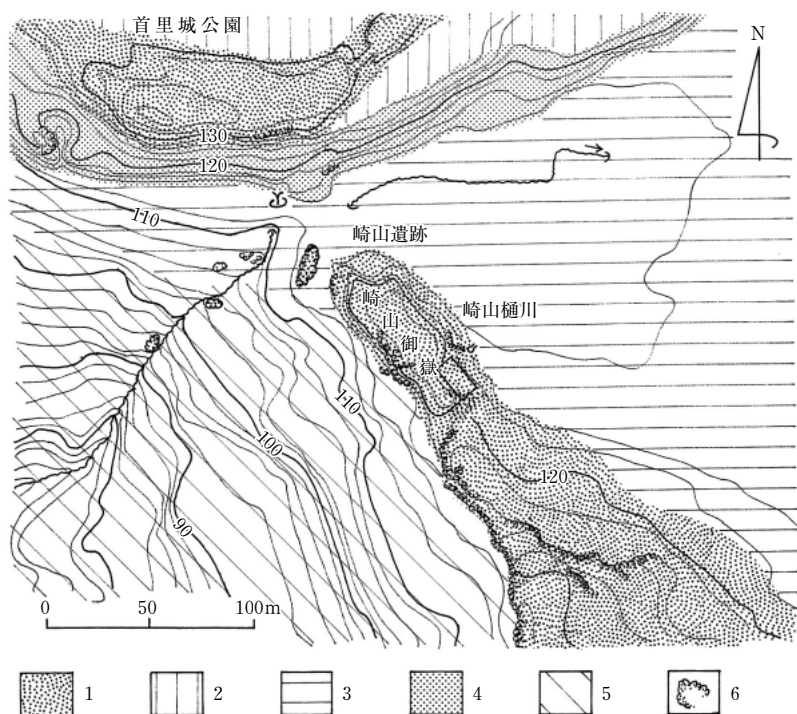


図19 崎山樋川付近の地形

1. 石灰岩堤 2. 上位段丘面 3. 中位段丘面 4. 段丘崖 5. 一般丘陵斜面 6. 急崖および露岩 図内の細線は等高線（単位：m）。

汲まれた、」と伝えられる。

樋川から西方へ70～80m離れた位置には崎山遺跡がある。遺跡からは、本土の縄文時代に当たる時代の遺物が出土していることから、石灰岩堤の周囲で、湧水がある場所では、数千年前から人類が居住していたのであろう。湧水地の一つが人工的に加工され、^{さきやまひーじゃー}崎山 樋川となったと考えられる。

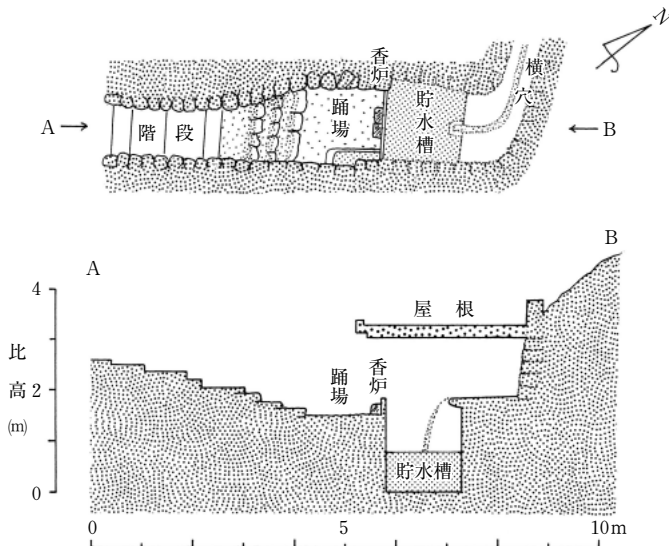


図20 崎山樋川の形態

井戸の位置は図19を参照。A-B は断面の位置。

5. 識名園内の育徳泉

(1) 所在地

那覇市首里^{まゐじ}真地

識名園は東西約150m，南北約100m，総面積約4.2haの広さで，かつては琉球王家の最大の別邸であると同時に，中国からの使者である冊封使を接待する施設でもあったと云う。造園は第二氏第14代目・尚穆王^{ほうこう}統治の嘉慶3（1798）年4月12日に着工され，同年12月20日に竣工している。

庭園内の造園形式は，池の周りを散策しながら，四季の情景や風景の移り変わりを楽しむ廻遊式庭園で，その中に，石造橋や建造物を配置する中国的様式を取り入れた和漢折衷様式である（図21）。心字池と称される広い池を中心に，周辺にはいくつかの小丘を築き，また池畔で，水面を挟ん

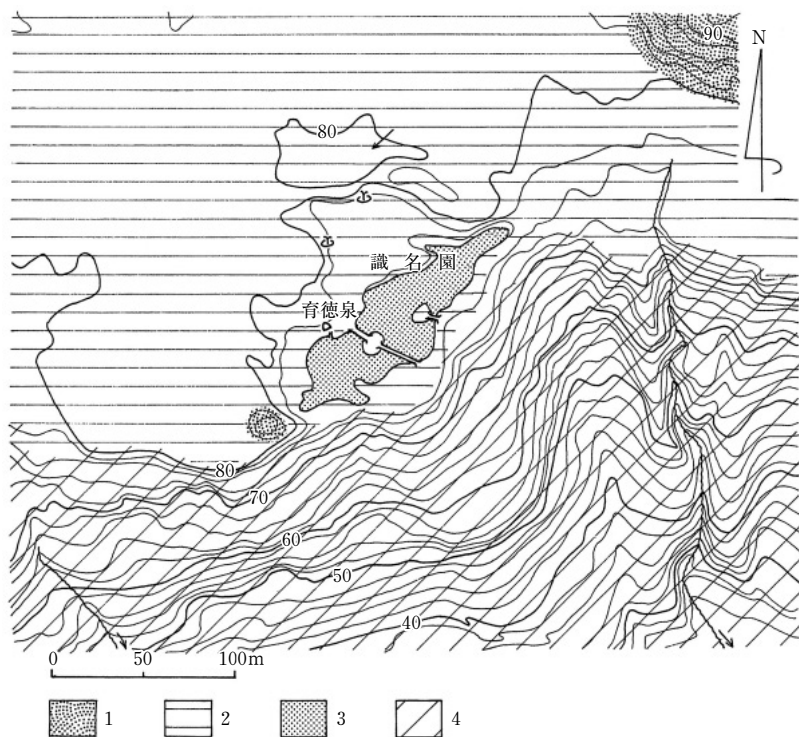


図21 織名前園付近の地形

1. 石灰岩堤 2. 段丘崖 3. 心字池 4. 一般丘陵斜面
図内の細線は等高線（単位：m）。

だ小島には六角堂を置き、池畔と小島は中国様式の小さな石橋で結ばれている。六角堂が良く見える対岸には御殿が建てられている。また池のほぼ中央にも小島（浮島）が置かれ、兩岸とは中国様式の石橋で結ばれている。

御殿から南西方へ幾分離れた位置に、心字池の水源にもなっている育徳泉がある。

（2）井戸付近の地形と地質

識名園は安里川あさとがわの南側で、標高70～80m前後の識名丘陵の南部に位置し、

標高は76m前後である（図1）。丘頂部はなだらかな起伏であるが、南側は急斜面で、地質の大部分は泥層やシルト層からなる豊見城層であるが、丘頂部には琉球石灰岩がキャップロック状に分布している（図21）。

（3）井戸の形態

育徳泉は心字池の水源となっており、平面形は踊場を中心に、曲線美が美しい合方積みの石垣を配置した構成になっている（図22）。通路から約0.7m低い踊場は、幅約2.4m、奥行き約3mの広さで、その奥部は、奥行き約2m、深さ約1.3mの半円形をした貯水槽となっており、その一部から地下水が湧出している。向かって左側にも幅約1.5m、奥行き約1mの貯水槽があり、石板状の覆屋根で覆われている。

貯水槽の背後には、二基の石碑が並んで立てられている。向かって右側の碑は、嘉慶5（1800）年に来琉した冊封正使の趙^{りん}文楷^{ぶんかい}が題した「育徳泉碑」、左側のそれは道光18（1838）年に冊封正使の林^{りん}鴻年^{こうねん}が題した「甘^{かん}醴^{れい}延^{えん}齡^{れい}碑^ひ」である。それらの前には香炉が置かれている。

心字池は南側の急傾斜地とは、池の水面から比高1～2mの堤防で隔てられ、排水溝である滝口は育徳泉の対岸に位置している。

（4）その他

識名園は廻遊式庭園であるため、育徳泉の曲線美が美しい合方積みの石垣や石碑の配置、あるいは遊歩道の石垣などは、効率性や機能性はほとんど持っていない。石造構造物そのものの美しさを褒め称えるための構造で、散策しながら見るだけで、心が和むようになっている。

昭和12（1937）年に国の名勝に指定されたが、戦争で壊滅的に破壊された。昭和50（1975）年から復旧工事が行われ、翌年には再び名勝に指定され、平成12（2000）年3月、首里城などと共に世界遺産に登録された。

井戸の入口には説明板が立てられ、下記の文章が書かれている。

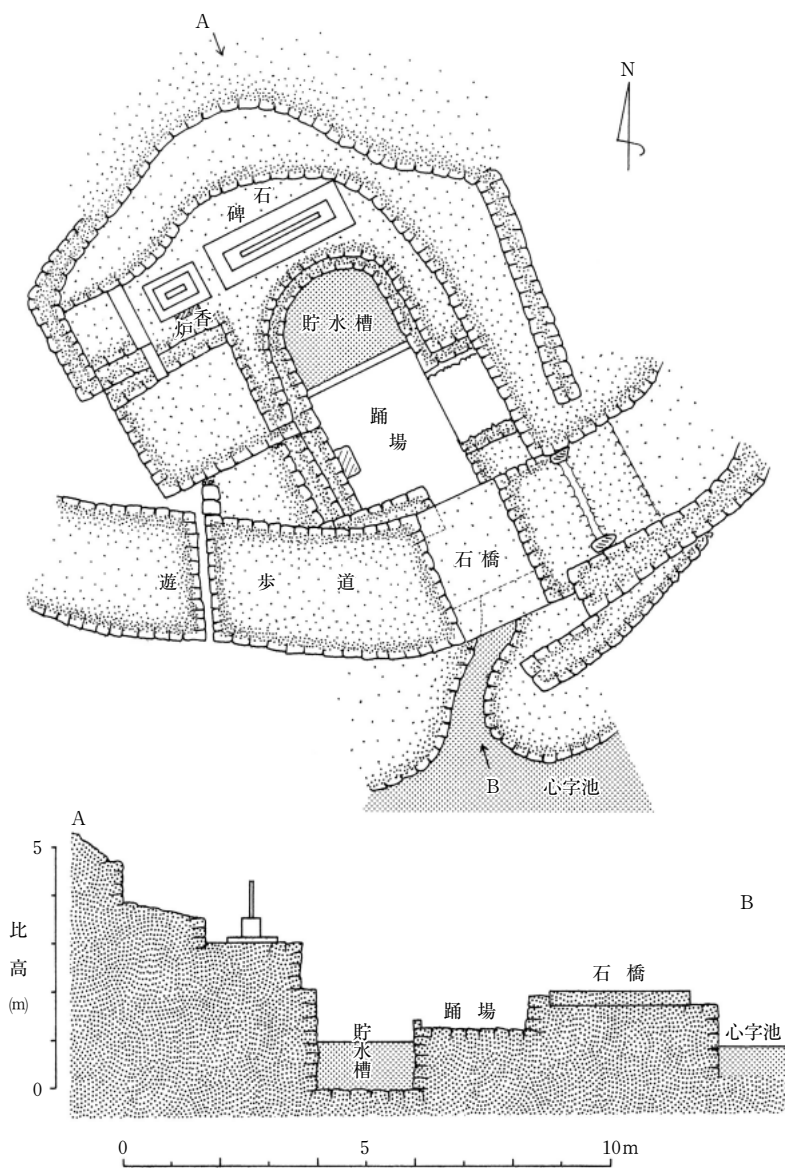


図22 育徳泉の形態

井戸の位置は図21を参照。A-Bは断面の位置。

育 徳 泉

育徳泉は清冽な水をたたえ、池の水源の一つにもなっています。琉球石灰岩を沖縄独特の「あいかた積み」にして、巧みな曲線が優しい美しさを感じさせます。また井戸口は右手にもあります。井戸口の上には、泉をたたえた2つの樋が立てられています。向って右は1800（嘉慶5）年、尚育王の冊封正使林鴻年が題した「甘醴齡碑」です。もとの碑は、戦災を受けて下部が破損したため、1980（昭和55）年に拓本をもとにして復元したものです。

まとめに代えて

長い間、慢性的な生活用水不足に悩まされていた住民たちの要求に対応するため、沖縄県を中心に各市町村では、水資源の確保に努力を重ねた。沖縄県全体での上水道普及率は、本土復帰前の昭和36（1961）年度には約55.5%であったが、以降、普及率は急激に上昇し、昭和48（1973）年度には90%を超え、昭和62（1987）年度には99%を超え、平成15（2003）年度には100%に達した（図23）。2009年度の給水量は約1.5億 m^3 で、その中の約63%は河川を堰き止めて水源としている（沖縄県福祉保健部薬務衛生課，2012）。

上水道の普及に反比例するかのよう^がに、住民の井戸^がに対する関心は次第に低下していった。水道の蛇口のcockを回すと、自動的に蛇口から浄化された新鮮な水が出てくる生活に慣れるにつれ、清浄な生活用水に感謝する意識が薄らいでいった。安全な上水を得るための苦労を記憶している住民が多い地区では、現在でも井戸の周囲の清掃を行い、遙拝の行事を行っ

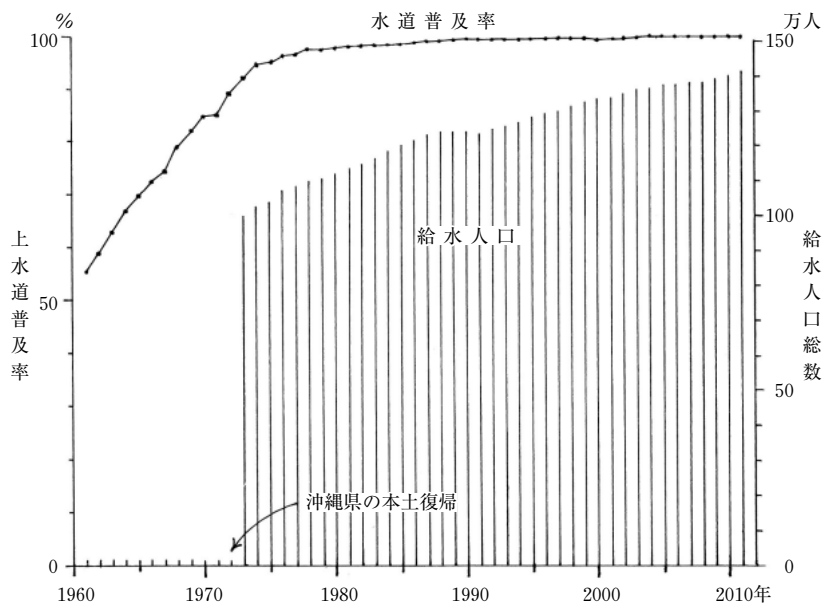


図23 沖縄県における上水道普及率と給水人口
(沖縄県福祉保険部薬務衛生課の資料より作成)

ているが、記憶が薄らいだ地区では放置され、ごみなどが散乱している井戸もある。那覇市教育委員会は井戸が地域住民の生活に密接に関係していたことを理由に、井戸が放棄され始められるようになった昭和50年代に、いくつかの村井戸^{むらがー}を市の文化財に指定し、1985年には悉皆調査を行った(那覇市教育委員会、1986)。

本報告では、首里城内と周辺地域の、かつて住民の生活を支えた古井戸を中心に、琉球石灰岩を用いた合方積みの石垣で囲まれた井戸の、形態や歴史などについて記載した。

なお、井戸や水に関する民俗的なことについては、小川(1971・1987)、大井(1973)、仲松(1975・1978・1990)、古家(1994)などに詳しい。

注

1) 「あいかた積み」の表記については、「相方積み」と記載した論文もある。しかしながら、「あいかた積み」による切石の組み方は、両方の石材を接する部分の凹凸に合わせ、あるいは隙間の角度や長短に合わせて巧みに加工し、隙間が無いように組み合わせている。「合わせ」について、岩波書店の『広辞苑』(第2版)によると、「あわせ」とは、“①二つ、またはそれ以上のものを、いっしょにすること。合わせること。”とあり、“相わせ”は無い。三省堂の『大辞林』には、「合わせ」の項に“あわせること、二つ以上のものを一つのすること”とあり、やはり“相わせ”は無い。さらに、田淵実夫の『石垣』の「アワセ」(合せ)の項に“石工の間でいう鮭の隠語。サケが「裂け」にきこえるところから「合せ」と言った”とあり、やはり“相”の文字は使われていない。

さらに、角川書店の『増補字源』によると、「合」には“あふ、あはす(會)あつまる(集・聚)つれそふ、配する、あひて(配耦)おなじ(同)たぐひ……”とあり、「相」には“あひ、あひたがひに(交互)あふ、まじはる(交)したち……”とある。井戸の周囲に設けられた石材を巧みに組み合わせた「あいかた積み」の表記は「合方積み」と表記する方が適切と考える。

参考文献

- 上江洲敏夫(1981) 沖縄の紙。仲程正吉編『図説郷土のくらしと文化』(下巻)。141～143。(新星図書出版)
- 氏家 宏・兼子尚和(2006)『那覇及び沖縄市南部地域の地質』。48p。(地域地質研究報告。5万分の1地質図幅)。(地質調査総合センター)
- 大井浩太郎(1973)『沖縄古代の水の信仰』。164p。(文教出版)
- 小川 徹(1971)産井の継承—北部沖縄の事例から。『日本民族学』(78)。30～51。
- 小川 徹(1987)産井の母姉継承。『近世沖縄の民俗学』。173～187。(弘文堂)
- 沖縄県(1994)『土地保全図』(一葉)。(国土庁土地局)
- 沖縄県福祉保健部業務衛生課(2012)『沖縄県の水道概要』(平成22年度版)。65p。
- 木庭元晴(1980)琉球層群と海岸段丘。『第四紀研究』18(4)。189～208。
- 篠原 徹(1999)記憶される井戸の村。『村が語る沖縄の歴史』。189～228。(新人物往来社)
- 角田清美(1993)淵上の石積み井戸についての自然地理学的研究。『専修人文論集』(52)。109～133。
- 角田清美(1994)伊豆諸島の古井戸についての自然地理学的研究。『専修人文論集』(54)。109～143。
- 角田清美(1996a)武蔵野台地における鎌倉街道に沿う古井戸についての自然地理学的研究。『専修人文論集』(58)。63～112。

- 角田清美 (1996b) 井戸には覆屋根は設けられていたか.『専修人文論集』(59). 201～233.
- 角田清美 (1998) 古新聞の記事を地理の教材に利用する.『駒澤大学高等学校紀要』(20). 17～30.
- 角田清美 (2001a) 河越館の古井戸.『専修人文論集』(68). 173～205.
- 角田清美 (2001b) 城郭内の古井戸.『専修人文論集』(69). 173～197.
- 角田清美 (2002a) 武蔵野台地西端付近の下り井.『専修人文論集』(70). 297～370.
- 角田清美 (2002b) 武州御岳山の古井戸.『専修人文論集』(71). 157～171.
- 角田清美 (2013) 先島諸島の古井戸.『専修人文論集』(93). 1～28.
- 創史社編 (1980) 首里グスク.『日本城郭体系』(1). 288～298. (新人物往来社)
- 高良倉吉 (2001) 琉球の形成と環シナ海世界. 大石直正・高良倉吉・高橋公明編『周縁から見た中世日本』(日本の歴史14). 141～264. (講談社)
- 鶴藤鹿忠 (1972) 飲料水.『琉球地方の民家』. 279～287. (明玄書房)
- 当間一郎 (1981) 沖縄の井泉. 仲程正吉編『図説郷土のくらしと文化』(下巻). 114～140. (新星図書出版)
- 仲松弥秀 (1975) 水の神.『神と村』. 101～104. (伝統と現代社)
- 仲松弥秀 (1978)『古層の村・沖縄民俗文化論』. 333p. (沖縄タイムス社)
- 仲松弥秀 (1990) 水のセヂ.『神と村』. 164～170. (梟社)
- 長嶺 操 (1992)『沖縄の水の文化誌』. 188p. (ボーダーインク)
- 長嶺 操 (1998)『沖縄の水の文化誌』. 263p. (沖縄村落史研究所)
- 那覇市教育委員会 (1986)『那覇市歴史地図—文化遺産悉皆調査』. 271p.
- 福島俊介 (1987)『沖縄の石造文化』. 202p. (沖縄出版)
- 古家信平 (1994) 水の信仰.『火と水の民俗文化誌』. 204～250. (吉川弘文館)
- 外間守善 (1980)『沖縄の歴史と文化』(NHK 市民大学). 164. (日本放送出版協会)